

## Stieler's Handatlas と佐久間象山

多 田 文 男 (地理・名誉教授)

私がまだ現職で地理学教室にいた頃、佐久間象山の業績を研究している増沢淑氏が来学されて、「Stie-

ler's Handatlas というのはどんな地図帳でせうか」と訊かれた。Stieler's Handatlas と云えば戦前にドイツ Gotha の Justus Perthus 社が出版した地図帳であって、その資料の正確なことと印刷の鮮明なことで Andree の地図帳と共に世界に冠たるものであった。英国では第一次大戦中に Stieler の手法を無断借用して今日見る様な立派な地図帳を出すようになった。ソ連は第2次大戦後、Gotha の設備をモスクウに移して地図帳を出すようになったと噂される。地理学教室には新・旧版の Stieler's Handatlas が数冊あるので、増沢氏にお見せした所、その中で古色蒼然たる一冊、併し銅版刷で鮮明な第Ⅲ版(1857年刊行)を取上げて、「これこそ佐久間象山が愛用された地図帳そのものではないか」と驚かれた。

この地図帳は地図の蒐集家秋岡武次郎博士が赤門前の古本屋で買って、昭和初年に地理学教室に寄贈されたものである。地図帳の巻首には朱の捺印があり、その半分は切取られてはつきりしないが「長崎官衛」とだけ読める。増沢氏によると、この印は長崎の幕府出張官の出した輸入許可印であり、此時、この地図帳が3冊輸入されたと言う。その1冊は葵文庫にあり、1冊はどこそこ(失念)にあり、残りの1冊が佐久間象山所有だったのが、行方不明になっていたものであると云う。

Handatlas といっても、袖珍本ではなく37cm×27cm×5cmあり、相当大版分厚のものである。83図からなり、第2-3図は月の図、第4図は太陽系、第5図aには赤道以南にて眺め得る星座、bには赤道以北の星座をあげ、第10図には世界の山岳高低比較図があり、第50図cには西南オーストラリアのゴールド・デストリクテが記入してある。以下増沢氏の著書から抄録する。

佐久間象山は文久2年江戸の村上誠之丞の世話で万国地図帳を手に入れた。その礼状に「ハンドアトラスに至り候ては精絶妙絶心目を驚かし申候。巻首の天体にもネプチュニスの両月を始とし、是迄伝聞のみにて名を辯へ候はぬ新惑星20箇に及び、5世界

の山岳高低、列国の分界、アウストラリアの金穴に至る迄これを掌上に視候如く、是にてこそ真の有用の地図と称す可しと殊に辱けなく大慶致し候」とある。更に象山は「5年前(安政4年)に於て開板相成候精しき地図」と書いている事からこの銅版彫刻の鮮明のものであったと考えられ、地理学教室所蔵のものがそれに当るのではなからうか。象山のもっていた世界的知識は梁川星巖に送った手紙の中に「今の世は和漢の学識のみにては何分行届かず、是非共5大洲を総括致候大経済に之なくては叶い難く候。全世界の形勢コロンビウスが究理の力を以て新世界を発見し、コベルニキユスが地動の説を発明し、ネウトンが重力引力の実理を究知し、3大発明以来万般の学術皆其根柢を得、聊かも虚誕の筋なく、悉皆着実に相成、欧羅巴、<sup>メリケン</sup>弥利堅諸州次第に面目を改め、蒸気船、マグネチセ、テレグラフ等創生し候に至り候て実に造化の工を奪い候儀にて愕く可く怖る可き模様に相成候」とあることから解る。蒸気船1隻もなく鉄道も1里もない当時のわが邦の現状を見て外国と事を構えることの危険を痛切に感じていたのである。

象山は元治元年京都に上った時もこの地図を持参していた。公務日記4月23日の条に「午后山階宮へ参じ地図を御覧に入る。御感賞あり」とあり、5月15日には中川宮に拝謁しているが、此時も地図を以て時勢を御話申し上げた事と思われる。かく山階、中川両宮殿下、二条関白に拝謁した際は必ず世界地図を拵げて御話したらしい。7月17日即ち象山遭難の日にも午前の中より馬に騎って世界地図を携へ山階宮へ伺候した。帰途には秘蔵の地図帳を徒者塚田五左衛門に持たせて家に帰らしめ、薄暮高瀬川に沿い木屋町通りを上らんとして三条通附近で凶徒の手にかゝり仆れた。この地図帳の行方はその後解らなくなった。

東大地理学教室の地図帳を見る度に象山の識見を懐う次第である。